

H26.10.11

増加するネット、薬物、ギャンブル`依存症`

Dr.

和



「心と体のバランス」シリーズ⑧



長尾和宏 (ながお・かずひろ)
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうとという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。56歳。

町医者のもとには日々、さまざまな症状の方が来られます。眠れない、イライラする、体がだるい、やる気が出ない、などなど。鬱病なのかな？と思いつつ、鬱病なのかな？、「依存症」だと気がつきません。

「最初から言ってくれればいいのに」とも思いますが、多くは患者さん自身が、〇〇依存症であるとの自覚を持っていない。あのタイガーウッズでも、セックス依存症の治療に苦しんだと聞きます。依存症は現代社会において、大人も子供も、そして高齢者も、すべてそこにある大きな「落とし穴」に思えます。そもそも「依存症」とは何務所から出てきても、また同

ニコチンやアルコールだけでは

治すことは極めて困難です。ニコチンやアルコールは「完全中止」ですが、ネット依存は「禁ネット」以外に「節ネット」という方法もあります。いずれもカウンセリングや患者会などの個別対応と、教育・医療・行政の連携による社会としての対応が両輪となります。どうか「依存症」という言葉の意味と重みを知って頂ければ幸いです。

じ過ちを繰り返します。一旦脳内に形成された報酬系を消し去ることは困難なのです。ニコチン依存症やアルコール依存症を身近に見ている方なら納得できるでしょう。

薬物依存として、覚醒剤依存のほか、危険ドラッグや向精神薬の依存患者が急増しています。昔からあるアルコール依存症は、従来の中年男性患者が減少して、高齢化が目立ちます。

かを、ニコチン依存症を例に説明します。たばこを吸うことは、200種類以上の毒物を体に入れることなのです。なかでもニコチンが脳の受容体に結合した結果、ドーパミンという快楽物質が放出されます。

人間も動物も「快楽」には弱いもの。何度か快楽を味わううちに、またその刺激が欲しくなります。いつしか、刺激↓快楽という報酬↓また刺激が欲しい、という「報酬」の回路が脳の中に形成されます。

芸能人が薬物や覚醒剤などで時々逮捕され、せつかく刑務所から出てきても、また同連携が大切です。

在宅医療で診ている高齢患者さんの中にもアルコール依存症の方が時々います。また、平成2年以降はギャンブル依存症が増えています。わが国では女性の多くはパチスロやスロットによるもので、これは、鬱病、発達障害や統合失調症といった精神疾患の合併が少なくないので、精神科医や専門スタッフとの連携が大切です。